

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：42699

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17226

研究課題名(和文)認知症高齢者グループホーム選択までの過程とその選択基準

研究課題名(英文)Process and selection criteria to select group home of elderly with dementia

研究代表者

辻 泰代(YASUYO, TSUJI)

貞静学園短期大学・専攻科介護福祉専攻・講師

研究者番号：20611388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：環境変化に伴う不適応状態を起こしやすい認知症高齢者が、グループホームに入居後もその人らしい生活を継続するために、どのような基準で入居先を選択し、入居までにどのような過程を経ているのかを明らかにした。関東にある7箇所のグループホームにおいて、入居者11名、家族介護者7名、施設長7名、介護職員7名を対象に、半構造化面接法によるヒアリング調査を実施した。その結果、入居までの過程は家族介護者が中心に行われており、入居者は、入居前に見学したり、入居の荷造りなどをする機会が殆どない実態が明らかとなった。家族の選択基準は明らかにすることが出来た。入居者の納得のもと入居出来る環境づくりが今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：We found that the elderly with dementia is apt to cause the damage of relocation. A purpose of this study is to clarify criteria for selection and go through the process before entering the group home when a elderly with dementia and a family caregiver chooses group home. Semi-structured-interviews of seven family caregivers and eleven dementia elderly and seven facility directors and seven care workers were held at seven places of group home in Kanto. As a result, the process to move to the group home is mainly performed by family caregivers, and the elderly with dementia have hardly visited before entering the group home, and there is almost no opportunity to prepare moving luggage. The family caregivers have various criteria for selection when they chose group home for dementia elderly person. The future task is to create an environment where elderly people with dementia can agree and enter the group home.

研究分野：認知症介護

キーワード：認知症 グループホーム 選択基準 リロケーションダメージ 入居前見学 高齢者福祉

1. 研究開始当初の背景

平成 25 年 6 月に発表されたデータによると、65 歳以上の高齢者のうち認知症高齢者は約 462 万人に上り、認知症になる可能性がある軽度認知障害 (MCI) の高齢者も約 400 万人いると推計された。その後、2025 年には認知症高齢者が 700 万人を超えるとの推計も発表され、認知症高齢者の数は今後も増加していくことが予測されている。

平成 18 年の介護保険法の改正に伴い、グループホームは居宅サービスから地域密着型サービスに位置づけられ、住み慣れた地域での生活の継続を主眼とした支援の仕組みづくりの方向性が示された。認知症高齢者数の増加に伴い、認知症高齢者が住み慣れた地域で生活することが出来るグループホームの需要は、今後もさらに高まると考えられる。

また、認知症高齢者は、入居などの環境変化による不適応状態 (リロケーションダメージ) を起こしやすいとも言われている。しかしながら、これまでの先行研究では、グループホームの入居支援に関するものはほとんどみられていない。グループホームの選択基準をテーマにした論文はいくつかみられるが、調査対象者は、介護職員や看護師・教員などの専門職であり、利用者を対象にした調査ではない。

我が国においても、平成 16 年の「痴呆」から「認知症」への呼称変更や、Tom Kitwood によるパーソンセンタードケアの浸透などにより、近年、認知症の当事者が、自身の経験を講演したり、手記として発表する動きが活発になっている。認知症ケアにおいては、認知症高齢者本人の声や想いを尊重することはもちろんのこと、認知症によりニーズを言語化出来にくい場合であっても、声にならない声を援助者側が理解していくことが重要であると考えられる。

入居という大きな環境変化を伴う場面において、認知症高齢者本人は、入居までの間にどのような過程を経ているのか、どのような想いを持っているのか、当事者の声をもとに明らかにしたものはみられていない。また、家族介護者にとっても入居は大きな決断の場面でもあると考えられるため、どのような選択基準を持ってグループホームを選ぶのか、入居後の生活にどのような期待を持っているのか、利用者側の視点から明らかにする必要がある。さらに、グループホームの施設長や介護職員は、入居までの過程をどのように捉えているのかを明らかにし、利用者側とサービス提供者側という両者の間に認識の差があるかどうか、実態を明らかにする調査はみられておらず、基礎的調査が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、環境変化による不適応状態 (リロケーションダメージ) を起こしやすい認知

症高齢者が、入居後もその人らしい生活を継続するためには、どのような基準で入居先を選択し、入居後にどのような生活を望むのか、利用者側からの視点で方向性を探る研究である。認知症介護の切り札として誕生したグループホームにおいて、利用者側はどのような期待を持ち、どのような生活を望むのか、認知症高齢者本人および家族介護者の声から明らかにしようとするものである。

また、サービス提供を行っているグループホーム側は、入居時に利用者側がどのような選択基準を持っていると考えているのか、施設長および介護職員の声から明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、大きくわけて以下の 2 つの内容からなる。

(1) 「利用者側からみたグループホームの選択基準とグループホームを選択するまでの過程」を明らかにする調査。

調査対象者は、認知症高齢者、家族介護者である。

(2) 「サービス提供者側の考える利用者にとってのグループホームの選択基準」を明らかにする調査。

調査対象者は、グループホームの施設長、グループホームの介護職員である。

調査方法は、半構造化面接法によるヒアリング調査である。個室での個別面接形式で実施した。

倫理的配慮として、貞静学園短期大学の倫理審査の承認を得て、許可された計画に基づいて調査を実施した。調査開始前に、グループホームの施設長に調査実施の同意を得た。調査対象者には、研究の目的・方法・協力の任意性・秘密保持・個人情報保護等について、文書および口頭で説明を行い、同意を得て実施した。

分析方法：対象者の同意を得て録音した IC レコーダーのデータから逐語録を作成した。その後、佐藤郁哉の質的データ分析法を参考に、定性的コーディングを行い、概念的カテゴリーを見出した。

4. 研究成果

(1) 利用者側からみたグループホームの選択基準とグループホームを選択するまでの過程を明らかにする目的で、グループホームの入居者である認知症高齢者、および、その家族介護者を対象としたヒアリング調査を実施した。

【 認知症高齢者を対象にした調査】

調査対象者：関東にあるグループホームの中でヒアリング調査の依頼を行い、研究協力が得られた 7 箇所のグループホームに、調査期間中に入居を経験した入居者のうち同意の

得られた5箇所11名の入居者である。
調査期間：平成28年9月16日～平成29年12月23日。入居後2ヶ月～6ヶ月以内に調査期間を設定した。入居後の生活がある程度落ち着くと考えられる時期ということと、入居前・入居直後の記憶が比較的鮮明であると考えられるためである。本調査を実施前に、何度かグループホームを訪問し、関係づくりのコミュニケーションを図り、話しやすい環境を持てるようになってから、後日改めて調査日を設定し、本調査を実施した。

入居前にグループホームの見学の有無およびその時の心境、入居前の引越に伴う荷造りの有無について明らかにした。

「市の紹介で見学に来た」、「見学に来ていない」、「覚えていない」という3つの概念的カテゴリーが見出された。入居前にグループホームを見学していたのは、11名中1名のみであった。この1名は、市の職員と見学に来たと回答しており、市の職員との会話や、見学の経緯を覚えており、一度見学に来たと話した。一方、見学に来ていないと答えた者は4名、覚えていないと回答した者は4名いた。回答がみられなかったものは2名いた。

入居前の引越に伴う荷造りについては、「準備した」、「誰かに準備してもらった」、「覚えていない」という3つの概念的カテゴリーが見出された。荷造りを自分で行ったのは、11名中2名のみであった。着替えや置き時計、夫の写真や犬の写真、タンス、下着などが具体的に挙げられた。誰かに準備してもらったと回答した者は6名、覚えていないと回答した者は2名いた。回答がみられなかったものは1名いた。

グループホームに入居することを家族介護者等からどのように説明されたかについて明らかにした。

「説明された」、「説明されなかった」、「嫁に配慮した自らの入居の決断」という3つの概念的カテゴリーが見出された。説明されたと回答したのは、11名中5名であった。夫に説明された、市の職員に説明された、入居前施設の看護師より説明された、公民館だと言われたなどが挙げられた。説明されなかったと回答した者は4名、嫁に配慮した自らの入居の決断と回答したのは1名、回答がみられなかったものは1名いた。

入居前後の生活について、家族への想い、今後の夢や今後も続けたいことについて明らかにした。

入居前の生活と現在の生活については、8つの概念的カテゴリーが見出された。「共同生活を送るということ」、「自分のペースを守った生活」、「認知症に伴う中核症状」、「入居時の寂しさ」、「遠慮する気持ち」、「自宅を思う」、「金銭面での不安」、「悲観的な見通し」である。入居後、家事に携わったり、家族のような関係となることに加え、一人の時間を大切にすることも出来ていることが窺えた。また、物忘れを感じたり、自宅を想い寂しい

気持ちになったり、職員や他入居者への遠慮の気持ちや、年金だけで大丈夫かなど不安な気持ちもみられることもわかった。最期について考えるという声もきかれた。

家族への想いについては、「家族への配慮」、「帰りたい気持ちの抑制」、「孤独感」、「諦め」という4つの概念的カテゴリーが見出された。

今後の夢や入居後も続けたいことについては、「外出」、「仕事」、「自宅での暮らし」、「現在の生活の継続」、「考えることを断念」、「将来を悲観する」という6つの概念的カテゴリーが見出された。

〔考察〕

今回、入居までの過程について、「見学」、「荷造り」、「入居することの説明」、「入居前後の生活」という大きく4つの項目について調査を行った。

本人の参加という視点でみたところ、見学については1名、荷造りについては2名のみという実態が明らかになった。入居することの説明については、5名が説明されたと回答してはいるが、中には、公民館だと言われたなどという声もあった。つまり、入居までの過程を認知症高齢者本人の視点でみていくと、これから入居するということがほとんど知らされず、どのような場所に入居するのかということも入居前に見学出来ておらず、引越に関する荷造りも自身では行なえていないということが浮き彫りとなった。今回の調査対象者は、入居前の住まいが、自宅ではなく他施設に入所中であった者もいたということも影響していたとは考えられるが、入居までの過程において、入居するという心の準備が出来ていた入居者はほとんどいないのではないかと推察された。

入居者が納得して入居出来る環境を整えるためには、入居する当事者である本人が、入居までのプロセスに関わり、選択できる場が求められる。このことにより、リロケーションダメージも軽減出来るのではないかと考えられる。

今回の調査でも、認知症に伴い、「覚えていない」と回答した者もいた。しかし、入居までの過程に参加したが時間が経って忘れるということと、忘れてしまうため参加する場が提供されていないということとは全く重さの違うことであることを、家族介護者を含む援助者側は意識しておかなければならない。

また、今回の調査を通じ、認知症であっても、置かれた状況を踏まえ、家族を想いやり、辛い気持ちを押し殺しながら、中には諦めの感情を持ち生活していることが、入居者本人の声を通し明らかにすることが出来た。認知症高齢者本人の声のもつ力強さを再認識出来たと同時に、本人主体のケアの重要性が示唆された。

【 家族介護者を対象にした調査】

調査対象者：関東にあるグループホームの中でヒアリング調査の依頼を行い、研究協力が得られた7箇所のグループホームに調査期間中に入居を経験した入居者の家族介護者のうち同意の得られた4箇所7名の家族介護者である。

調査期間：平成28年9月16日～平成29年12月23日。

入居前にグループホームの見学の有無およびその時の心境、入居前の引越に伴う荷造りの有無について明らかにした。

家族介護者は、7名全員グループホーム入居前に見学をしていた。しかし、入居者と一緒にグループホームを見学したのは、7名中2名のみであった。入居者と一緒に見学しなかった理由としては、まだ自宅で見られると思っていた段階だったから、自宅にもう一人要介護者がいたため1日で複数見学予約を入れていた、本人が他施設に入所中であったため一緒に来られなかった、歩ける時は一緒に行ったが今は歩けないため、などが挙げられた。

入居前の引越に伴う荷造りについては、入居者と一緒に行ったのは7名中1名のみであった。それ以外の6名は、家族介護者が本人に代わり荷造りを行っていた。家族のみで荷造りをしたことについては、他施設に入所していたためそのまま持ってきた、本人が荷造りしていないので混乱はあったかもしれない、などが挙げられた。

グループホームに入居することを家族介護者等からどのように説明したかについて明らかにした。

入居について認知症高齢者本人に説明したのは7名中6名であった。具体的には、他施設にいたが出なければいけない、自分でやるのがわからないからここにいる、延長で泊まる、家族介護者が入院するからなどと説明していた。一応言ったが意味がどこまでわかっているかという声もきかれた。

グループホームを選択する際重視した点（選択基準）について明らかにした。

選択基準については、9つの概念的カテゴリーが見出された。「見学時の施設の雰囲気」、「見学時の他入居者の様子」、「施設長の雰囲気」、「職員の雰囲気」、「職員の対応」、「面会のしやすさなどの立地条件」、「金銭面」、「手作りの食事」、「趣味活動の継続」である。趣味活動の継続では、畑で野菜を作ったり、庭で花を育てられることなどが魅力として挙げられた。

入居後の現在の想いについて明らかにした。

入居後の現在の想いについては、7つの概念的カテゴリーが見出された。「入居出来たことに対する安心感」、「入居を選択したことに対する悲観的な想い」、「認知症の症状の安定を実感」、「認知症の進行を実感」、「他者に介護を任せるといふ決断」、「やむを得ず割り

切る」、「続柄による辛さ」である。

〔考察〕

今回、入居までの過程について、家族介護者にも、「見学」、「荷造り」、「入居することの説明」、「グループホームの選択基準」、「現在の想い」という大きく5つの項目について調査を行った。

グループホームの見学については、家族介護者は、現在入居しているグループホームを入居前に7名全員が見学していた。しかし、入居者と一緒に見学したのは2名のみであり、入居者と一緒荷造りをしたのも1名のみであった。入居者の調査からも明らかになったことではあるが、見学や荷造りについては、やはり家族介護者が中心に行われている傾向が読み取れる結果となった。

一方、入居することの説明については、7名中6名が説明したと回答していた。今回調査に同意の得られた対象者である家族介護者は、本研究の主旨に賛同し協力するという意識の高い対象者であったことが考えられる。そのため、入居することを事前に本人に説明し、納得を得ようとする意識があったのではないかと推察された。

グループホームの選択基準としては、金銭面や立地条件、手作りの食事や趣味活動の継続などのグループホームのハード面に加え、見学時の施設長や他入居者の様子、施設長や職員の雰囲気や対応など、ソフト面での基準も多く挙げられた。これから共同生活を送る上で、他入居者や職員の様子を選択基準として重視していると考えられた。

現在の想いでは、入居という場面は、家族介護者にとってもストレスのかかる状況であることが明らかになった。家族介護者は、ようやくグループホームに入居出来たということに安心感を得た一方で、自宅で見られなかったことに対する後悔や、認知症が進行したと感じるなど、揺れ動く悲観的な想いも抱いていることが明らかになった。家族介護者も、自身の病気を抱えていたり、他の家族にも要介護者がいる者もあり、日々の生活の中で、介護や自身の仕事、子育てなどを並行しながら、入居先を探している状況を明らかにすることが出来た。そのため、本人がデイサービスなど他のサービスを利用している間に1日何件か見学の予定を組んで見学をするなど、家族介護者からみて見学をするということの大変さも感じられた。

入居者本人が見学や荷造りを一緒に行うなど、グループホームを選択出来る環境を整えるためには、家族介護者の理解を得る必要があるが、家族介護者も入居を決断する際、揺れ動く想いを持っているため、家族介護者の気持ちにも寄り添う必要があることが示唆された。入居者本人、および、家族介護者の双方が、入居までの過程に本人が参加することの重要性を認識出来ることに加え、援助者は、入居者本人や家族介護者の入居の決断した背景にある想いに寄り添う支援も必要

であると考えられた。

(2) サービス提供者側の考える利用者にとってのグループホームの選択基準を明らかにする目的で、グループホームの施設長、および、介護職員を対象としたヒアリング調査を実施した。

【施設長を対象にした調査】

調査対象者：関東にあるグループホームの中でヒアリング調査の依頼を行い、研究協力が得られた7箇所のグループホームに勤務する施設長7名である。

調査期間：平成28年8月20日～平成29年10月27日。

グループホームの入居前の見学の実態を明らかにした。

これまでに関わった入居者のうち、グループホーム入居前に認知症高齢者本人と一緒に見学していた事例の数を調査した。7箇所のグループホームのうち、2箇所は入居前に必ずグループホームに来てもらい、その場でアセスメントしているということもあり、この2箇所については、全員が見学しているということであった。見学時の他入居者との会話の様子などをみて、共同生活の適応度をみる目的があるという回答もみられた。しかし、残りの5箇所のグループホームでは、最小値1名～最大値5名という回答であり、平均すると1箇所あたり2.8名であった。8割～9割は家族だけで来る、家族も大変なのだという声が聞かれた。

施設長が考える利用者にとってのグループホームの選択基準を明らかにした。

施設長が考える利用者にとってのグループホームの選択基準は、11の概念的カテゴリーが見出された。「見学時の施設の雰囲気」、「見学時の他入居者の様子」、「職員の雰囲気」、「面会のしやすさなどの立地条件」、「金銭面」、「医療が必要になった場合の対応」、「普段の生活の様子」、「入浴の頻度や設備」、「職員の構成」、「清潔感」、「居室環境」である。

〔考察〕

見学時の施設の雰囲気や他入居者の様子、職員の雰囲気や立地条件、金銭面というところは、家族介護者と一致していた。さらに、見学時に家族介護者から質問が多いというところから、入浴や医療が必要な場合の対応、居室環境などが挙げられていた。これらの項目は、家族介護者からみた場合、見学時に質問し、その場で納得が得られたことであるため、特に選択基準として意識されなかったのではないかと考えられた。また、見学時も、普段と変わらないありのままの生活の様子を見てもらうように意識しているという声が多く、グループホームで聞かれた。

【介護職員を対象にした調査】

調査対象者：関東にあるグループホームの中

でヒアリング調査の依頼を行い、研究協力が得られた7箇所のグループホームに勤務する介護職員のうち施設長の推薦がありかつ同意の得られた6箇所7名の介護職員である。調査期間：平成28年8月20日～平成29年9月8日。

グループホームの入居前の見学の実態を明らかにした。

これまでに関わった入居者のうち、グループホーム入居前に認知症高齢者本人と一緒に見学していた事例の数を調査した。6箇所のグループホームのうち、1箇所は入居前に必ずグループホームに来てもらい、その場でアセスメントしているということもあり、全員が見学しているということであった。残りの5箇所では、0名～数名という回答であった。介護職員は交代勤務であり、自分が見学の様子を見たことがある事例に限られたため、このような回答となった。

介護職員が考える利用者にとってのグループホームの選択基準を明らかにした。

介護職員が考える利用者にとってのグループホームの選択基準は、11の概念的カテゴリーが見出された。「見学時の施設の雰囲気」、「見学時の他入居者の様子」、「職員の雰囲気」、「職員の対応」、「面会のしやすさなどの立地条件」、「金銭面」、「医療が必要になった場合の対応」、「普段の生活の様子」、「入浴の頻度や設備」、「外出の頻度」、「趣味活動の継続」である。

〔考察〕

見学時の施設の雰囲気や他入居者の様子、職員の雰囲気や立地条件、金銭面、趣味活動の継続というところは、家族介護者と一致していた。施設長と比較すると、職員の対応や、外出の頻度については異なっている。介護職員にとっては、自身の入居者への関わり方や、外出時のケアを選択基準として見られているのではないかと意識していることが明らかになった。

〔結語〕

調査全体を通し、入居先の選択において、利用者側・サービス提供者側の両者にとって、入居前の見学の場が大きな役割を果たしていることを明らかにすることが出来た。一方、入居までの過程においては、見学や荷造りなどの準備の段階において入居者の参加の機会がほとんどなく、家族介護者中心に行われている実態も浮き彫りとなった。その背景には、家族介護者の日々の介護負担感や、これから入居を決断することに対する揺れ動く想いも影響していることが示唆された。

認知症高齢者本人や家族介護者が、複数あるグループホームの中から、納得して入居先を選択出来るよう、サービス提供者側であるグループホームには、見学日時の調整や入居者が一緒に来やすいような仕組みづくりが求められている。

また、今回はグループホームの選択基準に

講師

研究者番号：20611388

についても明らかにすることが出来た。入居前に入居者本人が見学している事例が1例しかなく、認知症高齢者本人の声をもとに選択基準を明らかにすることが出来なかったのは、大変残念である。入居前に当事者である本人が見学をすることが当たり前の社会となり、どのような選択基準で入居先を選択したのか、入居者本人の声をもとに明らかに出来るよう、今後も調査を続けていきたい。今回は、家族介護者・施設長・介護職員の視点から、選択基準を明らかにすることが出来た。利用者側・サービス提供者側を比較したが、大きな認識の差はみられなかった。サービス提供者側であるグループホームは、今回の調査結果を踏まえることで、より選ばれるグループホームになるための一助となれば幸いである。

入居直後は、入居者・家族介護者・グループホームの施設長・介護職員にとって、大変デリケートな時期である。そのため、調査にご協力いただくことが難しいという理由で、調査が実現しなかったものもあった。その中で、対象者の皆様には、貴重な時間を割いて下さり本調査にご協力いただいたことに、感謝の意を述べたい。

本調査は、利用者側・サービス提供者側からグループホームの選択基準を明らかにした基礎的調査という役割は、果たすことが出来たと考えている。今後は、さらにデータ数を増やし、調査結果を一般化出来るよう、研究を積み重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

辻泰代、「認知症高齢者グループホーム入居に向けた選択基準に関する一考察(その1) 入居者の視点からの分析」、『貞静学園短期大学研究紀要』、査読有、(9)、2018年3月、pp127-143

〔学会発表〕(計2件)

辻泰代、「利用者側からみた認知症高齢者グループホーム入居までの過程 入居者および家族介護者の視点での分析」、『第19回日本認知症ケア学会大会、2018年6月16日、朱鷺メッセ

辻泰代、「認知症高齢者グループホーム入居を選択するまでの過程に関する研究 - 入居者および家族介護者を対象にしたヒアリング調査からの分析 - 」、日本認知症ケア学会 2017年度中国・四国地域大会、2018年1月21日、サンポートホール高松

6. 研究組織

(1)研究代表者

辻 泰代 (TSUJI YASUYO)

貞静学園短期大学・専攻科介護福祉専攻・